

(4) 関心を持ってもらうための試み

自然災害にはさまざまなものがあり、突発的に起きることから、規模が大きくなると避難することだけでも命がけということになります。日本列島においては、この自然現象をどうかわすのかということが極めて重要で、これまでもさまざまな知恵を駆使してきました。今でいうところのソフト対策とハード対策の両面を組み合わせ苦闘しています。その比率は、ソフト対策主体からハード対策主体へと科学技術の進展とともにシフトしてきていますが、最近ソフトの重要性を経験的に学習したことやハード対策の守備範囲やそれ自体の限界も理解すること、加えてITの活用でソフト対策の質的向上を図っていくというような傾向にあります。

極端な言い方をすれば、ハード対策は構築されれば民生の安定度はアップする反面、災害への関心が薄れてしまうことは否めませんが、ソフト対策は人との関係が深くなっていかなければ進化しませんので、関心を持ち続けていくことが必至になります。あらゆる方法で、あらゆる機会に防災を考えていくことが必然なことにもなります。そのためにもコミュニティとか防災教育、企業における事業継続プランニングは大事な場となります。

いつくるかわからないが必ず来る、来たら大事になることはわかっている、普段から気にしろというのは、かなり無理があるわけです。うまいことというのはやや気が引けますが、日本列島ではどこかで災害のニュースがかなりの頻度で発生します。このようなものを、単なる一時のレポートと思わずに、わが身に置き換えて学習の教材にするということだけでも大変に役に立つものになります。ぜひ、町内会などでも、恒例の避難訓練、炊き出しも大事ですが、このような事例を参考に地域や身のまわりの見直しをすることで地域防災力が向上します。そして、他地域の事例こそが忘れそうなきに覚せいするきっかけになって風化防止、災害ボケ防止に有効になると思っています。

徒然草第六十六段 人間の営みあへるわざを見るに、

人間たちが営々として互いになりわい生業を立てている有様を見るに、春の日にゆきぼけ雪仏を作つて、その雪仏に金銀珠玉の装飾を施し、あまつさえお堂を建てようとするにも似ている。そのお堂が出来上がるのを待って、そこに雪仏を安置するなんてことが出来ようか。人の命は今は確かに存在しているように見えても、目には見えないところから消

えていくこと、あたかも雪のように儚^{はかな}いものであるのに、そのかりそめの命のあるうちに、せつせと苦勞して将来を期するようなことがはなはだ多いのである。

(林望謹訳「徒然草」祥伝社より)

兼好法師は何を教えたかったのだろうか、先を見ない狭小なさまは人間の性であるといいたかったのだろうか。先を見て活かすことをすべきであるということは、トレードオフの中で課題を見つけてアプローチすることの大切さ、そしてリスクコミュニケーションをするというマネジメントこそが意味のあるものになるというようにも感じてしまいます。災害への対応も防災への提案も、相手が巨大なだけに一見無為さを感じることもあります。それは災害の特性からして無理のないことかもしれません。それは、災害の不定性にも関連しているわけで、減災のための活動もそれによる結果も多様で多岐に亘ることからなかなか共通解が見出せていない中での対応ということになるからだと思います。それでも、安心して暮らすためには、安閑としてなされるままにでは安定した継続性が維持できませんので、何とか科学的な知見に加えて、わずかばかりのこれまでの経験したことを駆使して生きようということになります。